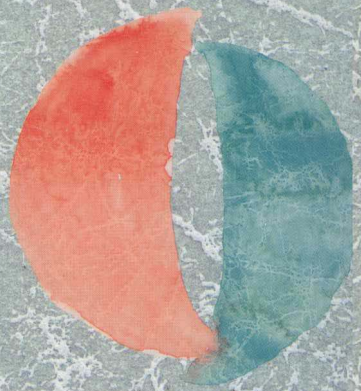




ユーモアについての

43章

新島正著

新島 正(にいじま・ただし)

1921年9月島根県に生まれる。

戦前より戦後にかけて満6ヶ年を肺患のため病床に送る。仏教的世界に傾倒。著書に「ユーモア—教養への反省」「人生論を越えて」「蒸発人間—歪められた現代の映像」(共著)などがある。

ユーモアについての43章〈新装版〉

平成14年5月31日発行

著 書 新 島 正

発行者 小 島 米 雄

発行所 株式会社 潮 文 社

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-31

電話 03-3267-7181(代)

振替・00140-7-69107

印刷所 有限会社 埼京印刷

製本所 株式会社 越後堂製本

©Tadashi Nijima 2002 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-8063-1360-2

ユ一モアについての
43章

新島正著

目

次

1	宇宙的視野……………	九
2	忘れな草……………	三
3	才能……………	六
4	放蕩息子……………	五
5	彼岸の味……………	七
6	人生と玉ネギ……………	三
7	魅力……………	三
8	開封された手紙……………	四
9	詩魂……………	七
10	開かれた世界……………	五
11	則天去私……………	五
12	子供の世界……………	五
13	高貴藥……………	三

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
彼をして怒らしめよ	随所作主	あたりまえのこと	感動	非僧非俗	獣医の弁	女の段階	悟	奇蹟	ある音痴	風変りなパーテー	自然であること	般若湯
二三	二六	九	六	四	三	六	六	三	九	六	三	九

27	勲章	二七
28	乾杯	二八
29	結婚式の祝辞	二九
30	逆説	三〇
31	狸問答	三一
32	鹿を追う狩人	三二
33	泉	三三
34	帝王学	三四
35	脱落の妙趣	三五
36	年令	三六
37	郷愁	三七
38	涙	三八
39	不住涅槃	三九

40	「一冊の本」族……………	二〇六
41	無用の用……………	二八
42	ある健康法……………	三七
43	鐘の音……………	三三
	あとがき……………	二二〇

カバー絵

星 襄 一

新装版の発行にあたって

本書の初版が出てから、もう四十年あまりになる。幸い何度も版を重ねてきたが、あらためて今、読み直してみると、よくいえば若さ、悪くいえば、どこか固い青さを感じてしまうのは、年齢のせいであろうか。

そんなこともあって、新装版を出すことには少々ためらいもあつたが、そんなことにこだわること自体、本書の趣旨にはそぐわないのではないか。よくも悪くも、若い時のことは若い時のままが自然ではないかと、納得することにした。

曲のない人生は淋しい。ユーモアは人間であることの証である。あかし

本書が少しでも多くの方々に読まれれば、望外の幸せと思う。

平成十四年四月

著者

1 宇宙的視野

豊臣秀吉にこんな逸話が残っている。

あるとき、日ごろ秀吉が愛翫していた丹頂鶴を、家来の一人がふとした過ちから逃がしてしまった。過失を犯した家来はこれを苦に病み、秀吉にこのことを報告すれば、お手打とまではいかなくてもクビになるくらいのこととは当然だろうと思つたが、そのまま黙つてすますわけにもいかない。意を決して、秀吉におそるおそるそのことを白状した。

ところが意外にも秀吉はそれほど腹をたてた様子もみせず、その家来にききかえした。

「鶴は、一体どこまで逃げてゆくのかな」

「はあー」

「この日本を離れてしまうかな」

「そんなことはあるまいと存じます」

「そうじやろうな、——それならそれでいいじやないか。日本にいるかぎり、わしの国に間違いないからのう」

逃げた鶴も、日本の国にいるかぎり、所詮はわが家の構内にいるのだから何も気にかけることはない、という。さすがに秀吉には秀吉だけの器量があつた。

今日、文明の進歩は、世界をかつての八百余州の日本よりはるかに狭いものにしてしまつた。そして、やがて地球引力の圏内から自由に飛び出せるという、いわゆる宇宙時代を現出しようとさえしている。地球からぬけ出して、お盆のように黄色く光つてみえる天体を指さしながら、あれが地球だと客観的に眺める時代が来ようとしているのである。乗り合わせた宇宙船の硬質ガラスの窓から地球を眺めたときの気分を想像することは、そんなにむずかしいことではあるまい。

自由だ、共産だ、A教だ、B教だ、勝つた、負けた、という人間相剋の図など、あまりにちつぽけで馬鹿げてみえるに違いない。人間の視野も、この辺りまで展げないとウソなのかも知れない。

高い山の頂に登つて、浩然の気を養うというのも結構である。だが、山から下りて駅のベンチに腰をおろしたとたん、弁当の食べがらをとどころかまわす投げ散らすようでは、「浩然の気」がきいてあきれようというものだ。

せめても、みんなで遊ぶ公園、みんなが通る道路、みんなで眺める美しい河、そんなみんなの共有物くらいは、わが庭、わが河、わが道として大事にするくらいの襟度がなくては話にならない。まして公職の地位を利用して、私腹を温めようなどというみづちい根性にいたつては言外の沙汰である。ユーモアなど、とても、日暮れて道遠しというものだ。

われわれが真に宇宙時代に生きるか、とざされた四畳半の世界にしか生きないかは、本質的にはわたしたち一人一人の生きてゆく態度如何にかかっているといつてよいのである。

2 忘れな草

江戸時代の蘭学者佐久間象山について、こんなエピソードが残されている。
ある人が、

「先生は何でもご存じですが、一つおたずねしたいことがあります」

「何ごとですか？」

「実は金満家になりたいと思うのですが、何かいい方法はありませんでしょうか」
すると象山は、につこりと笑ってこんなことをいった。

「そうですね、片足をあげて小便をすることにしたらいいでしょう」
相手はおどろいた。

「え？ それでは犬と同じじゃないですか」

「さよう、犬になることです。およそ人情など心得えている人間には金満家などには、なれつこありませんよ」

さて、だから、金持はイコール人非人だなどと思つてはいけない。にもかかわらず、この話をきいて、少くとも、「ウソをつけ」などという氣になれないのも事実だ。

だいたい、根つから金こそ人生第一のことと心得えているほどの人間になると、金以外のものはあまり眼に入らず、また入れているだけの余裕などないようである。彼には、生きてゆく上の目的がはつきりと一つにしばられているので、もつている力のすべてがこの一事にかけられ、ちやうど強い磁石にかけられた鉄粉のように一つ方向に威勢よく勢揃いをする。こうして、生活の極度な集中が、自然、彼をその道の成功者にするとはたしかだ。ただそのため、目的達成に関りのない事柄には、一切冷淡になる。

これは、たとえば恋愛一つについても言えることである。いわゆる恋愛至上主義者になると、自分の恋路の邪魔になるものは何でも犠牲にしかねない。いや、それをあえてするのが、この至上主義者たちだ。

すべてを事業にかけているもの、一切をおのれの社会的名誉にかけて生きている人間に

しても、その生き方は本質的には同じだといつてよい。私はこれを人間生活における一種の中央集権的な生き方であると考ええる。かつての日本の軍隊が当時の国策の一本化によって世界有数の実力をもつことができたように、彼はその目的を大幅に達成することによつて、一かどの成功者の列に加わることができるに違いない。

しかし、そのために如何に多くのものが見捨てられ、見のがされてしまったかを、彼は案外気づいていないのだ。その中には、彼が得た最後の目的物よりもはるかに重大な意味をもっているものも、あつたかも知れないのである。

半生を政治運動に傾けてきたある男が、何かのことで罪を問われ、獄舎の中に憂愁の日を送る身になつた。ある日のこと、厚く閉された独房の、高く小さな格子窓から窓の外をのぞいてみた。荒れた獄舎の庭の片隅に生い茂る雑草にまじつて、とり残されたように一にぎりの小さな忘れな草が咲いている。無聊なるままに、男は可憐なその花を眺めるともなく眺めていたが、何か、急にわれにかえつた思いで、はッとなつた。

ここに、こんな花が咲いているという、彼の心の中に、一つの驚きにも似た思いがあつた。彼は、不思議にも、生れて今はじめて、その花を見る気がしたのである。男は、考え

るともなく、何か自分の生涯というものにとつて、それが、重大な意味をもっていることのように思われてきた。見つめている男の眼に、小さい花の一輪一輪が何かなし、ある生々とした力をもつて迫ってくる。彼の心に、静かなる革命が起つたのだ。

国会のあの赤絨毯も、反対党の政客と渡り合つて国政を論じてきたかつての自分の姿も、今となつては何か空々しく、影絵のように虚しいものに思えてくるのである。政治そのものがどうだというのではない。人類の繁栄とか、国民の福祉とかを、威丈高かに論じてきた自分が、人類どころか、実は、もつとも肝心な自分、一個の人間としての自分の生活さえも本当にはわかつてはいなかつたという事実への、反省と驚きであつた。

むろん、彼も一本の花の美しさを知らぬわけではなかつたであらう。しかし、それにしては、かつて彼の眼に映つた花の美しさと、今、自分の眼の前に咲いている花のそれとは、ほとんど異質のものがあつた。今見るその美しさに比べれば、かつて自分が見てきた花は、ほとんど無にも等しいといつてよかつた。花そのものが変つたのだない以上、それまでの自分の眼が、花の前ではただの節穴に過ぎなかつたことを、彼は今更のように思い知らされたのである。たぶん、こうして多くのものが——本来われわれの心を満し生をう